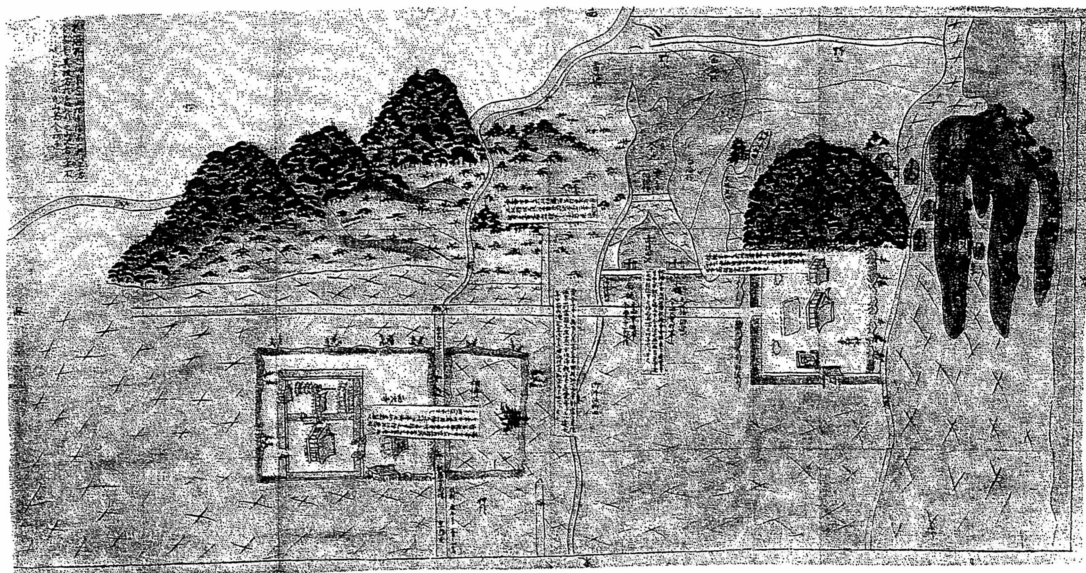


京都大学地理学談話会

会 報

第9号



大和国西大寺与秋篠寺堺相論絵図

1 9 9 8

[目次]

寄稿〔西村睦男先生・浮田典良先生〕	1
講演会の報告〔大島襄二先生・米家泰作氏〕	6
研究室便り	12
〈二度目の研究室移転〉	12
〈研究室の動静〉	13
〈3回生〉	13
〈学部卒業生・院生の進路〉	14
〈院生の研究状況の報告〉	15
〈1998年度講義題目〉	17
事務局から	18
〈地理学談話会 1997年度会計報告〉	18
〈受贈〉	18
〈寄付〉	19
〈訃報〉	19
〈お知らせ〉	19
〈1998年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ〉	20

寄稿

カンカン帽時代

西村睦男（昭和 13 年卒）

カンカン帽と云っても、若い人には解かるまい。これは戦前の夏の帽子で、広辞苑を引くと、「かたく編んだ麦わら帽」と書いてある。風が吹くと頭から飛んでコロコロ転がる、とまでは書かれていない。「かたく編んだ麦わら帽」とは、麦わらを真田紐のように堅く編んだもので、当時「麦稈真田（ばっかんさなだ）」と呼ばれ、広島、岡山、香川の三県が主要産地になっていた。カンカン帽のカンは、麦稈から出た言葉である。これは紳士がかぶる帽子として大正時代に大流行し、昭和 10 年代の前半まで流行の余波が続いた。

そのカンカン帽を、大学生もかぶったのである。私は昭和 10 年に入学し、13 年に卒業したが、夏になると、白い緋（かすり）の着物を着て、セルの袴（はかま）をはき、カンカン帽をかぶって外出した。当時、地理学教室は石橋教授、小牧助教授、米倉助手の時代であったが、石橋教授はご病身で、小牧助教授が教室の運営にあたっておられた。

カンカン帽をかぶるのは、私たちの代で終わった。昭和 14、5 年からわが国は完全な戦時体制下に入り、成年男子にはカーキ色の詰襟服、軍帽まがいの国民帽

の着用が強要されたからである。つまり、私たちがカンカン帽時代の最後を飾ることになったわけだ。

さて、カンカン帽時代、すなわち大正時代から昭和 10 年頃までは、いったいどんな時代だったのだろうか。私たちが、それを体験的に知っている最後の世代ということになる。

大正時代と云えば、まず思い出されるのが、その初期、京大と東大に地理学教室が誕生したことであろう。これによって、わが国にも本格的な地理学研究が始まったのである。

ところで、大正時代は、都市を中心に、大正デモクラシー、大正ロマンチズムと呼ばれる新風が吹いた時代であった。もちろん、疲弊した農村や不徹底な民主化など暗い面も多分に残されていたが、とにもかくにも、新風が吹きわたったことは確かである。その例を一つ取り上げてみよう。「赤い鳥」である。

「赤い鳥」というのは、漱石門下の鈴木三重吉が主宰者となって大正 7 年に創刊された、芸術の香り高い児童文芸雑誌である。この雑誌には、鈴木 of 提唱に共鳴して芥川龍之介、島崎藤村、徳田秋声、小川未明など、当時の一流作家が寄稿した。また、この雑誌は、毎号、児童による自由題の「綴り方」を掲載したが、これを読むのも楽しみの一つであった。

さらに、この雑誌には、新しい子供の歌が掲載され、またそれが作曲されて全

国に普及していった。これが、「童謡」である。

童謡は、音楽界の革命とも云えるものであった。それは、子供だけでなく、大人の心をもとらえ、ゆさぶったからである。たとえば、大正 8 年に掲載された、西条八十作詞、成田為三作曲の『かなりや』を取り上げてみよう。

「唄を忘れたかなりやは 後（うしろ）の山に棄てましょか いえ いえ
それはなりませぬ」

第一に、この歌詞は、それまでの文語調の「文部省唱歌」とは違って、平易な口語調の叙情詩であり、歌曲も、竹久夢二の絵を思わせるような、繊細な情感にあふれた旋律である。この童謡は、今歌っても、けっして新鮮さを失っていない。

この童謡運動には、作詞者として北原白秋、三木露風、西条八十、作曲者として成田為三、弘田竜太郎、山田耕作たちが参加した。

さて、私は、大正 13 年、小学校 4 年の時、初めて「赤い鳥」を知ったが、たちまちその虜となった。しかも、この年、両親の知人から創刊号以来の全冊を貰うことができた。私は、あの時の感激を今も忘れない。

「赤い鳥」は、昭和 11 年に廃刊となった。時代が、「赤い鳥」のような自由主義少年、少女ではなく、「少年倶楽部」の『のらくろ一等兵』のような軍国主義少年を尊重するようになったからである。

う。

もっとも、この時期、まだ大正の自由な空気は残っていた。学生生活にも、大きな変化はなかった。京大スポーツが強かったのも、この時期である。特に昭和 10 年前後はラグビーの黄金時代で、同大、早大、明大、慶大を連覇して、学生王座に輝いた。私と同期の下村数馬君は、当時の名ラガーである。なお、現在、京大アメリカン・フットボールが強いが、この創設に参画し、また今日の姿に育てたのは、昭和 29 年卒業の藤村重美君である。

さて、カンカン帽時代は、昭和 13 年頃で終わった。そして、カンカン帽は、ナチス支配前夜のドイツで製作され、昭和 8 年に封切られたオペレッタ映画『Der Kongress tanzt』（会議は踊る）で「Das gibt's nur einmal, Das kommt nicht wieder」（ただ一度、二度と来ない）と唄われた歌詞のように、二度と復活することはなかった。

軍靴の足音が近づいてきた。しかし、Das gibt's nur einmal, と口ずさむ程度の自由は、まだ残されていた。

コピー機以前

—教養部助手を勤めていたころ— 浮田典良（昭和 27 年卒）

神戸大学文学部に転出された石川栄吉さんの後任として、私が教養部地理学研究室の助手に就任したのは昭和 28 年 4

月のことであった。正確にいうと「教養部」という組織はまだなくて、「分校」と称していた。分校には吉田分校と宇治分校があり、学生諸君は1年目は宇治、2年目は吉田。研究室はすべて吉田にあり、地理学研究室は正門を入ってすぐのA号館の3階北側東端にあった。以後5年2ヶ月、昭和33年5月末まで、教授藤岡謙二郎先生、助教授西村睦男先生のもとで助手を勤めたのであるが、辞めたのが5月末という中途半端な時期だったので（就任した大阪府立大学教養部専任講師の発令が遅れたため）、後任（佐々木高明君）の採用が翌年4月まで持ち越されてしまい、そこで私が6月以降も週に2日か3日は京大教養部へ出向いて、無償で助手の仕事をした（別に命じられたわけではなく私が勝手にそうした）。従って実質的には満6年間、助手を勤めたことになる。

助手当時のこととして、いちばん印象に残っているのは「ガリ版印刷」である。

昨今は、ゼロックスだのリコピーだのというコピー機が、オフィスや大学ばかりでなく、小さなコンビニエンスストアの店先にも置かれ、当初は珍しかった拡大・縮小も、今ではできて当たり前、というありがたいご時勢なので、今の若い諸君には想像できないことであろうが、私が助手を勤めたころ、たいへん手間のかかった仕事が複写・複製であった。

2～3枚の複写は薄い罫紙の間にカー

ボン紙を挟んでできたが、数枚以上同じ書類を作成しようと思うと、謄写版であった。「ろう原紙」をヤスリの上に乗せ、鉄筆で字を書き、その部分だけインクが滲み出るようにして印刷する簡便な孔版印刷機である。字を書くときにガリガリ音がしたためであろう、一般には「ガリ版」と呼ばれていた。そして鉄筆で字を書くことを「ガる」と呼んでいたように思う。

毎年、入学試験が近づくと、「地理」の試験問題案を全学の入試出題委員会で議するため、西村先生がそれをガリ版原紙にせっせとガって、研究室の片隅で印刷しておられた。仕事の性質上「お手伝いしましょう」とも言えなくて、遠くから眺めていたのを覚えている。

西村先生は、講義の資料なども、読みやすいきれいな字で丹念にガって印刷しておられた。

それを見習い、私も随分ガリ版原紙をガった。例えば、藤岡先生を研究代表者とする科学研究費の総合研究で、櫛田川流域（昭和29年度）や紀ノ川流域（昭和30年度）へ出かけた時など、研究メンバーの事前打ち合わせ会の案内状をガリ、会合のときに配る資料をガリ、さらに共同の实地調査が済んで、メンバーがそれぞれ原稿用紙数枚に調査結果の概要をまとめて送ってくると、それもまたガって印刷し、ホッチキスでとめて冊子をこしらえた。

助手在任中にガったガリ版原紙の枚数は、恐らく 200~300 枚に達していたであろう。苦勞してガって印刷したのに、いつか処分してしまったとみえ、残念ながら、今ほとんど手許にない。残っているのは、昭和 31 年 6 月の史学研究会シンポジウム「戦後 10 年の歴史学・地理学・考古学」で、松井武敏先生とペアで発表を仰せつかったとき、プリントして配布した 1 枚だけである。

原紙は『四国原紙』というのを使った。B4 判で、5 ミリないし 1 センチ程度の間隔で方眼のはいったのが一般的であったが、とくに文字を書きやすいように原稿用紙罫をいれたものがあり、A プリント、B プリント、C プリントの 3 種が出ていた。A は字の升目が大きく、C は小さく、B はその中間。またそれぞれ縦書き用と横書き用があった。上記のシンポジウムの配布プリントは、多分「C プリント横書き」でガったものであるが、字数を数えてみると、1 頁（B5 判）が 40 字詰め 44 行で、かなり細かい。

ヤスリの目の粗さ細かさにも何段階があり、それとマッチした鉄筆を使う必要があった。自分の気に入った細かさのヤスリと鉄筆を、私は個人用にも買い、自宅に備えていたが、これもいつか処分してしまったらしく、手許に見あたらない。

以上述べたのは数枚以上を複製するためのガリ版印刷についてであるが、1 枚だけ複写するなら、最も簡単・素朴な方

法は、右から左へ手で書き写す筆写であった。昭和 29 年の夏私は、すこしオーバーな言い方であるが、暇な時間のすべてをつぎ込んで、1 冊の本をまるごと筆写した。それは明治 10 年の『全国農産表』である。

私が学生時代にかなり一生懸命読んだ論文の一つ、石田龍次郎「日本産業革命期の地理的諸相」（日本史研究 7 号、昭和 23 年）で、石田先生がこの農産表を使っておられるが、どこにあるのか、櫛田川の共同調査でご一緒した名古屋大学の井関弘太郎先生（石田先生とお親しい）に伺ったら、石田先生はあれを個人でもっておられる、古本屋で見つけたのだそうだ、とのこと。

そこで長いお願いの手紙を書き、昭和 29 年 8 月のはじめ、東京都武蔵野市吉祥寺の石田先生のお宅に伺って、一ヶ月拝借した。今ならコピー機で、時間にして半時間、費用にして 2,000 円か 3,000 円で簡単にコピーできたであろうが、そのころはそういかないので、ノート 4 冊にそっくり写し取ったのである。

その際、農産物名をいちいち書くのはたいへんなので、綿は W、菜種は N、麻は A、煙草は T というように、化学の元素記号のようなものを自分で決めて使った。これは今でも自分で使っている。

この全国農産表をフルに使って書いた論文の一つが「江戸時代綿作の分布と立地に関する歴史地理学的考察」（人文地

理 7-4, 昭和 30 年)である。そのほかいくつかの論文ないしそれに準ずるものを、この農産表を活用して書いた。

ところが苦心して筆写した 4 年後、昭和 33 年には、この農産表が『日本農業発達史』第 10 巻(中央公論社)として復刻され、さらにその 6~7 年後には、明治 9 年の分から 15 年の分まですべて、『明治前期産業発達史資料』の別冊(1)~(5)として復刻された。折角ひと夏かけて写したのに、という思いが、そのときにはあったが、しかし自分の手作りコピーを使っていくつかの論文を書き、すでに「もと」は取ってあると思ったし、また後になって考えると、筆写したことには、それなりの意味があったように思う。

その一つは、明治前期の郡の名前を覚えたことである。当時の郡は、和名抄に載っている郡名とほとんど同じである。

もう一つは、農産表の数字の誤りに気づいたことである。明治前期の統計によくあることだが、単位を 3 桁間違えるなど、途方もない誤りがかなり見られる。

なお、のちの話になるが、私はそうした誤りを全国的に可能な限り訂正し、その結果を「明治 10 年“全国農産表”を通じてみた農産額構成」(藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』上巻, 大明堂, 昭和 53 年)の中で示した。

ところで、話を複写に戻すと、文字や数字は筆写も可能であったが、地図はそ

ういかない。そこで助手当時、地図は写真に撮って原寸大になるよう焼き付けた。もっともこれは、私自身がしたのではない。昭和 32 年卒業の井戸君・大脇君・塚田君などと同級に池上一誠君という男(卒業後 NHK 勤務)がいて、京大写真部に属し、写真術に長けていたので、頼んで撮ってもらったのである。明治 20 年前後の 2 万分の 1 仮製地形図や、調査先で借りてきた古地図などを、写真に撮って現像し、焼き付けるところまで、全部自分でしてくれたのであるが、一眼レフ登場以前で、近接撮影の場合、レンズとファインダーの間の視差の調整など、いろいろ苦心が要ったであろうと思う。

接写に便利な一眼レフ「あさひペンタックス」が出たのは、私が助手を辞め、大阪府立大学に勤めるようになった昭和 33 年のことである。地理学の教員は私一人。僅かではあるが図書・備品・消耗品を買う予算を頂戴したので、早速注文したのが「あさひペンタックス」であった。それから数年間は、これをさんざん使い、古い雑誌の論文や、京都大学に届く外国雑誌の論文なども、これでフィルムにおさめ、CH という薄い印画紙に焼いて読んだ。また調査の際もこれと三脚を携行し、村役場の手書きの書類や大字の区有文書、旧庄屋の古文書などを、片端からフィルムにおさめた。

爾来早くも 40 年。その間、地理学の研究・教育用機器は、二転三転、長足の

進歩を遂げた。今やパソコン、インターネット、GIS等々、熟達しないことには研究者としてやっていけないご時勢になりつつあるようであるが、そうなりきる前に現役から引退できそうでヤレヤレ、というのが、目下の正直な感慨である。

講演会の報告

1997年11月14日、文学部博物館において、談話会秋期講演会として関西学院大学名誉教授・大島襄二先生と博士後期課程3回生・米家泰作氏（現：文学研究科研修員）に講演していただきました。

漁撈文化の地理学 大島襄二（昭和18年卒）

水界は人類にとってアネクメーネである。水の世界は異界であり、そこに行くのは冒険、命がけであり、場合によっては行かなくてもいい不必要な所である。積極的に水の世界に入るか入らないかで物の考え方が違ってくる。壱岐の触という農業集落は、海岸に面している場合でも、海岸の方には道路を持たず、陸だけで仕事をする。海があったら魚をとるというわけではない。海に入るのは異文化への積極的な行動である。

世界の文化を見ると、海に近づく人々と近づくかない人たちの二つにはっきり分かれる。近づくかない人たちは海を避けて恐れるということになる。例えばオー

ストラリアのアボリジニは、海を恐れる人たちである。海を恐れるか恐れぬかは文化の違いである。海に近づいた上で何をしようとするのか、それを得るためにどういう手段をとるのか、どういう道具を使うのかということ、そこから漁撈文化が始まる。文化は後天的に努力して獲得して身につけるもので、異なった世界である海に接するには、文化を創造しなければならない。一つ一つの民族、一人一人の個人によって創意工夫が違う。だから海の文化は面白い。

漁撈と漁業と水産業の違い、漁民、漁業者、漁師の違いについて述べておきたい。漁撈の撈の字は、水中に沈んでもものをとる、鉤でもものを取る、水中の物をすくい取るという意味がある。漁撈とは水生動植物を採捕することを意味する。漁業の漁の字は、すなどる、いそなどる、いさる、いそあさるというように、いずれも磯辺から始まっている。磯辺に漁撈文化の出発点がある。水面から20メートルが地球上で最も生物の豊かなところである。そこで魚をとる、貝を拾うことが始まった。しかし、魚が豊富だから漁業が盛んであるという経済活動としての損得以前の段階に漁業の分かれ目がある。

漁撈文化・狩猟文化を、経済階梯の中で最低位の文化として位置づけることには疑問がある。自給自足の生活の中では、魚をとるだけでは生活できない。交換をしなければならないし、漁期のことを考

えると加工保存もしなければならない。このような状況は農耕文化ではかなり後の時代に現れたことである。陸上の生活では、このように厳しい制約された状況はない。漁撈文化は自給自足ができず、集約的に物を交換するというシステムができあがっている。カナダの北西海岸にツィムシアンという部族がいる。そのメトラクトラという集落では、都市的機能が最初から意識されていた。また、青森の三内丸山遺跡では、漁撈文化が根付いてかなり大規模の人口の支持ができていた。漁撈文化と狩猟文化を比較すると、狩猟文化はのちに家畜を飼うようになってだんだん経済階梯の上位に移動するが、漁撈文化は少し違う。農耕文化と漁撈文化はセットにして考えられてきたが、徳川時代の土農工商には漁がない。漁民はそういったランク付けの中に入っていない人々だ。漁の系列と土農工商の系列は別の物である。

舟の発明によって、人間の居住空間が広がっていくが、人間は海の表面だけを見るようになった。陸の文化を持っている人でも近代化された生活の中では、舟に乗って一つ向こうの陸に行くことができる。太平洋にたくさんの民族が移動していく中で、農業をするためだけに移動するという人たちがたくさんいた。全部が全部、漁民というわけではない。

海洋文化、水面の文化という広がりの中で漁撈文化というものをみていくと、

解明すべき課題はまだ多い。ホーネルの漁撈文化人類学の本の中のフィジーの記録によると、土地の人の漁撈文化に基づいて漁業の法律が定められたという。また、マオリは海に関することはイギリス人から委任されていたという。海を使う人々には制約があり、乱獲すると食べていけないので、はじめから資源保護ということが頭にある。昔の日本の場合ならイソアケという制度があり、現代なら網の目を規制して小さな魚は捕らないということを考える。それでも大型の魚はなくなるということは起こってくる。それをどういう形で季節により場所により禁漁の時期を決めるかが人々の知識の中にあった。このような漁撈習俗を見る目を、現代の経済優先の風潮の中にもう一度取り入れなければならない。

地理学が漁撈文化にどう携わりうるか。地理学は物の地方的分布の学問であるというリッターの言葉をよりどころにした。物の分布論は人類学では主流とはならない。分布図を作るのは地理学者の特権であり、それを生かして漁撈の文化圏の地図を作っていきたい。かなりの漁具や漁法を集めてみると、インド洋のものも太平洋のものもどちらも東南アジアのものに接点をもつ。東南アジアは漁撈文化の起点であるという藪内の仮説は頷けるが、それには欠落もあり、赤道から離れた人々例えば北方のバイキングの考察は入っていない。そのほかインディアン

やエスキモーの漁撈文化にも目を向けてみると、サケ・マスの文化圏、ニシン・タラの文化圏、カツオ・マグロの文化圏が想定できる。各沿岸地域でサケをどう考えているか、それをどう祭っているか、最初に遡ってくるサケをどう扱っているかといったいろいろな伝承や民俗文化の中にサケが生き生きと根付いている。北ヨーロッパではそれがタラになる。このように魚を文化の指標にすることができる。日本でも、正月の祝いに使う物という視点から見ると、サケの文化圏とブリの文化圏が信州を中心にして両方が重なる。西日本ではブリ、東日本ではサケになる。このような文化圏の地図を作っていくことが地理学の一つの課題である。

最終的には、「魚」と「人」と「海」の三角形がなければ漁撈文化は考えられない。例えば、魚と人は漁業経済学、魚と海は魚類学、人と海は海洋学などで扱われるが、魚と人と海はそれぞれ関連があって、どれ一つも欠かすことができないにもかかわらず、この三つを同時に見ていくということが学問の分野であまりなされていない。

後半は、世界各地の実際の漁撈文化について、80枚あまりのスライドで話したい。

トレス海峡はアジア的なものと太平洋的なものとの境目にある。ヨーク島では、男と女が仕事を分担し、リーフの中は女の仕事場である。

ニューカレドニアにはポリネシア人とメラネシア人がいるが、漁に携わるのはポリネシア人である。ヌーメアの魚市場では、魚を売っているのはフランス人である。地元の人やベトナムから来た人は、野菜や果物を売っている。

ニューギニアのニューブリテン島のウムルムル村では、筌に特徴があり、筌漁業が盛んである。筌は村の共有財産で、魚群が近づけば海に沈めてマグロを獲る。

インドネシアのシドアルジョにはタンバックという16世紀からある池がある。海拔0メートル地帯が海岸から2~3000メートル奥まで続いていて、そこに池がある。池沿いではエビ漁業を行っている。エビが日本に高く売れるので、農業をしないで漁業だけで生活している。

アラブ首長国のアルバッテンでは砂漠に続いた海で漁業を行う。木がないところで船を造るので木材から輸入しなければならない。アフガニスタンから労働者がやって来て網を造っている。漁家は石造りである。

インド西海岸のヴェルソバでは、沖合漁業から船が帰ってくると、村中総出で獲った魚を干す。子供達も仕事を分担する。女が魚を仕分けし、分けた魚を魚干し場にもっていく。男はもっぱら漁に行くだけである。

カナダのブリティッシュコロンビア州プリンスルパートでは、カナダ最大のサケの缶詰工場という近代的なものと、サ

ケの人といわれたツィムシアンの人たちの仕事場がある。ツィムシアンは以前は白人のもとで低賃金で働いていたが、今では組合を作っている。ツィムシアンは夫婦で漁に出る。

カナダのニューファンドランドのセントジョーンズは、Fish といえばタラを指すようなタラの漁業地域である。エビやタラを町の人が海岸まで買いに来る。

漁撈文化は地理学と人類学の境目で両方から見ていく必要がある。漁撈文化論ということにして、あえて何学ということとは避けておきたい。

近世日本における山村概念の登場 とその意義について 米家泰作（平成5年卒）

日本において「山村」という概念がいつ登場したのか、またその意義はどう理解すればよいかということを話したい。現在使われている「山村」という言葉は、農山漁村と三つ合わせて普通用いられるが、この言葉が登場したのは明治時代である。農林省や農商務省が行政用語として使い始めているうちに一般化したものである。山村という言葉は漢詩など詩の言葉として使われることはあったが、それが一般化したのは近代に入ってからである。江戸時代に入ると「里方」、「山方」、「浜方」という表現が一般化する。この表現は村方文書や地方書、幕府・藩

の法令にもみられる。しかし、このような日本の村落を三つに分ける分け方は、古代・中世には意外と見当たらない。したがって、中世から近世にかけて村落を三つに分類するあるいは類型化するという考え方が確立したという仮説を立てることができる。

古代から近世にかけての山地、山村の使われ方について特徴的な史料を紹介したい。『日本書紀』にある神武天皇の東征のくだりは、古代の天皇家に対して山岳地の住民が恭順したものと古代史や民俗学の一部ではいわれている。『日本書紀』の応神天皇の項からは、山地に暮らしていた人々に対して古代国家が支配の枠の中に入れようという動きをみせていたことが読みとれる。日本の古代国家は稲作を携えて稲作中心の国家を作ったとみなされることが多かったが、山民が国家の支配に入れられると稲作に転向するののかという必ずしもそうではない。『類聚三代格』では、国巢人が狩猟を続けていて、それが禁制にあっていることがわかる。

中世に入ると山地を舞台にした荘園や公領がみられるようになる。従来このような荘園や公領の存在は注目されていなかった。柚が作られて山地が開発されていくことは注目されていたが、それとは無関係に、山岳地帯に荘園公領が展開しているということは注目されてこなかった。四国の種野山という国衙領では、米

が年貢の中心にはなっておらず、絹、皮、鳥、兔、葛などが年貢の内容になっていた。同じく四国の大忍荘では、油、胡麻、米、葛粉、板、檼、芋、綿、灰、炭などが年貢になっていた。米でない雑多な年貢が要求されていたのは、これらの荘園が山の中にあるので仕方なくそうになっていたのかということ必ずしもそうではない。中世においては、低地部、山麓部、山間部、低山部に立地している荘園では、このような雑多な年貢は一般的にみられたものである。若狭国名田荘では綿、油、椎、むかご、胡桃、干蕨、栗、柿、鮎などが年貢として徴収されていた。このような年貢の内容と山岳地帯の荘園公領の年貢の内容とはさほど変わらない。中世においては、一般の荘園公領においてもある程度狩猟採集を前提とした産物が要求されているので、山奥でも荘園を設定して年貢を収納する意義はあった。西日本ではこのような山奥の荘園はたくさん存在したと想像されるが、史料がほとんど残っていない。

畑と畠は中世では使い分けがなされていたという説があり、畑の方は焼畑か焼畑に関わるものと考えられている。焼畑は必ずしも山奥にだけ分布しているわけではなく、奈良盆地、紀ノ川下流などにもみられる。日本の焼畑は現在でこそ山村にしか残っていないが、平安・鎌倉時代までは平野部周辺の丘陵地帯、低山にも残っていたと思われる。そうすると、

焼畑は山岳地帯のみの農業とはいえなかった時代があったのではないだろうか。古代から中世にかけての山地は政治的にどのような位置にあったかという、林業に特化した杣を除けば、山地は一般の荘園公領と年貢の上で特に変わるということは必ずしも考えられていない。また、畑作の面からみても、焼畑が山地にのみ残っているということも必ずしもいえない。その意味で、山地と平野の政治的な境界、生業上の違いは曖昧なまま続いていた時代があったのではないか。しかし、これが近世になると変化が起こる。その変化は「山方」という語の確立と深く関わっている。

近世になると、山村に対して特定の産物を移出せよという機能が割り当てられるようになる。古代から林業に関してはすでに年貢の要求があったが、そのほかにも鷹巣山、鉾山の経営といった特定の機能が割り当てられるようになる。そして、焼畑が徐々に規制の対象となり始める。例えば、日向の椎葉山の文書には焼畑を咎める記述がある。また、淀川の水系では、治山治水のために焼畑が禁止されていた。このように山村に対して焼畑を禁止していく動きというのは、山村の生業システムを無視した発想である。それは、山村に対して一般の農村と同じように常畑や田の農業に転換せよという考え方である。このような山村の捉え方は、山村に対して一方では特定の資源を産出

することを求める。そして他方では、一般の村落と同じような畑作村落として規定しようとするものである。

このような動きの背景として「村柄」という言葉に注目したい。「村柄」という発想は、幕府が適切な課税をするために出てきたものである。田畑を上中下の生産力に分け、その生産力に応じて課税するのが近世の石高制である。しかし、一般の上中下という位づけでは捉えきれない田畑があり、幕府はそれに対しても厳しく検地をして地目をつけた。信州高遠領検地条目では、焼畑に対しても検地をしてランク付けを行い、焼畑が存在する地域に対して特別の配慮が必要だと正式に認めている。そこでは新たに野や山に対して検地することで増税のきっかけにしようという考えがみられる。このような野や山に対する注意は村柄という言葉で表される。村柄を見分けるためには、農業にだけ注目せず、野や山、海や川の状態にも目を配って税率を設定せよということである。

このような焼畑への課税、山への課税、あるいは村柄という言葉は、幕藩体制の確立する十七世紀後半から少しずつみられるようになる。江戸時代の初期には、幕府も山には注意を払っていなかったが、十八世紀に近づくにつれて注意を払い出す。その背景として、一つは増税を意識し出したことがある。もう一つは、石高制を正規に運用するだけでは山村や漁村

に対して課税を増すことができないので、「焼畑」という地目を作ったり、山野に対して正式に検地をするというように税の幅を広げようということである。さらにもう一つは、山村における商品経済に目をつけたことである。これは、近世の中期になって商品経済が日本全体に発達していく動きに沿ったものである。農民が商売に関わることを禁じた享保の法令では、山村や漁村はそこから除外されていた。材木や木炭を販売するのは「山方」とあるという認識を幕府の方でも持っていたことがわかる。

近世の「村柄」という言葉から山方がどう位置づけられるかということだが、一つは、正規の石高制のもとでは課税しにくい、増税しにくい村方であるということである。だから特に注意して、焼畑や林産物、薪炭を税にからめとるようにという必要から、地方書や法令では「山方」という概念を用いる必要があった。山地に住むことは古代からあり、それが政府の支配下にあったというのも古代からのことである。ただし、古代や中世においてはそれらに「山方」という言葉を与えて特別扱いしようとはしていなかった。そこでは一般の荘園や国衙領と同じ課税方法が援用されていた。これに対して、近世に入り石高制が敷かれると、山村や漁村が税制の網からこぼれ落ちそうになり、それを捉えるために「山方」や「浜方」を領主が認識し直さなければな

らなかった。一般の農村とは違う補集合あるいは残差として「山方」という言葉が確立したのではないかと考えられるが、その実証は今後の課題となる。

研究室便り

＜二度目の研究室移転＞

成田孝三

すでに「以文」40号でもお知らせしましたように、昨年夏に研究室・実習室が8階建ての新棟の6階に移転しました。私が助手となった2年目の65年に現東館の東半分が増築され、その2階に研究室・実習室が陳列館（旧博物館）の2階北西隅（現在は取り壊されて存在しない）から移転しました。私にとっては大学勤務の開始期と定年退職期に同一研究室の2度の移転を経験したことになります。この30年間に社会は大きく、大学はほどほどに変化しましたが、移転の様式も変わりました。65年の移転では、助手が現場監督兼作業員として、院生中心の学生の協力のもと、荷車によって多くの物品を運搬しました。作業がかなりハードであったため、一部の院生から強い不満が出たことが思い出されます。今回の移転では、入札によって選定された専門業者からあらかじめダンボールとラベルが配布され、それを用いてまず廃棄物と運搬物を選別・明示し、書籍等はダン

ボールに詰めるという作業を研究室で行い、あとは業者がラベルの指示にしたがって移転先にそれらを運搬しました。今回私は自分の研究室の移転に必要な作業をただけで、他の作業の多くは事務の真木さんと学生諸君によって行われましたが、65年時ほどに作業内容はきつくなかったようですし、若干の謝金も支給されました。なお今回の移転を期に、従来哲・史・文と分かれていた閲覧室が新館地階に統合され、当研究室に配架されていた雑誌を中心とした書籍もすべて閲覧室に隣接する学部図書館に収納されました。利用時間に制約があるうえに部外者は利用手続きを要しますので従来より不便ではありますが、研究室の利用スペースは書籍が抜けただけ大きくなりました。

新棟6階の西寄り北側に共同研究室と2つの教官研究室、南側に実習室と1つの教官研究室が配置されています。加えて旧陳列館2階に引き続き1研究室（現在は金田教授室）があります。新しい部屋の大きさはこれまでとほとんど変わりませんが、天井張りをさけたことによって最近の建物にしては天井が高く、室内がうんと明るくなりましたし、北側では比叡山や北山の、南側では清水山の眺望が楽しめます。それに研究室、実習室とも机と椅子を一新し、実習室は床下にコンセントを取り付けたいわゆるOAフロアーとしました。遅ればせながら研究室も現代化しつつあり、10台のパソコンを

装備し、教官・学生ほぼ全員がEメール
アドレスを持っています。乱雑で汚いこ
とが大学研究室・教室の伝統であり、そ
れが一種の落ち着きを醸し出すというこ
ところもありましたが、あらゆる分野で世
界標準が云々されている昨今ですから、
研究室もまた清潔で整頓された空間とし
て維持されるよう願っています。

新棟は現在学内で一番高い建物ですか
らよく目立ちます。東西南の3方に入口
が設けられていますが、旧本館の正面入
口に比べていずれもが極めて貧弱で、個
人住宅でいえば勝手口のような感じです
し、内部の造りも従来と比較して重厚さ
に欠けます。しかし機能的には向上して、
大小の会議室、複数の大講義室、計算室、
音響・映像機器装備室等も備わっており、
今秋の人文地理学会の大会会場を自前で
設営できるようになりました。学会や談
話会のおりにでも是非一度お訪ね下さい。

＜研究室の動静＞

教室の事務は引き続き真木智子さんに
御願い致しております。

本年度は、大学院博士後期課程8名、
修士課程5名、学部4回生9名、3回生
8名、大学院研修生2名、特別研修コー
ス1名、科目等履修生1名、聴講生1名、
となっております。

＜3回生＞

本年度は8名の3回生を迎えました。簡

単に自己紹介して頂きます。

岩間伸一

出身は岡山県倉敷市、水島コンビナート
のすぐそばです。今、京大の文学部で、
自分が地理学を学ぼうとしていること自
体が不思議に思えてならない日々が続い
ていますが、ここに来た以上は、十分に、
また、楽しく勉強していきたいと思いま
す。宜しくお願いします。

尾崎真弘

大学から一步も外に出ずに研究ができる、
というのは何か物足りない気がして地理
学を選びました。とはいっても、理論や
文献がなくては話にならないので、基礎
的な学力不足を補えるよう何とか頑張っ
て行くつもりです。宜しくお願いします。

小野寺伴彦

初めまして、小野寺伴彦と申します。
出身は、福島県の県立安積高校です。自
転車旅行が趣味で、日本を回っているう
ちに、そこに暮らす人々などに興味を持
ったのが地理学を志望した動機です。こ
れからは勉強の方が忙しくなるので旅行
は控え目に。

酒匂幸樹

「酒匂」という名前のせいか、（酒匂
川のある）神奈川県の出身かと聞かれる
こともありますが、関係はないようです。
千葉に生まれて東京で育ち、関東平野か

ら出たことがなかったので、山に囲まれた京都での生活からよい経験を得たいと思います。

中辻 亨

はじめまして。地元京都の伏見に住む中辻亨（すすむ）と申します。家の中で本を読むだけでなく、実際に外を歩き回ることによって考えたいと思って地理学を選びました。今は、「自然環境と人間」ということに興味があります。どうぞ宜しくお願いします。

中村尚弘

石川先生のゼミに所属しております。現在、体育会居合道部で事務責任者という重役を担っており、また、今年は最高学年でもあるので、居合道にも打ち込みたく、石川ゼミや独書講読と両立できるか心配しております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

村田陽平

岐阜県出身です。都市に関係することに興味があり、地理学を専攻することになりました。趣味はテニスですが、今は京大アマチュアダンスクラブというサークルで部長をしています。どうぞ宜しくお願いします。

山田浩子

出身は愛知県の東の端、豊橋です。中学・

高校時代は吹奏楽部でクラリネットを吹いていましたが、今は今日でも通用する中世の喜劇『狂言』を演じるサークルに属しています。地理学に関してまだ何も知らない未熟者ですが、どうぞよろしくお願いします。

〈学部卒業生・院生の進路〉

* 学部卒業生

赤松範明	大同生命
朝山博之	明星中・高校教諭
泉谷洋平	大学院文学研究科
伊藤休一	
井上喜徳	NTT
上村謙介	NTT コミュニケーションウェア
叶谷房子	文学部聴講生
川合大地	EDS ジャパン
河野良平	大学院文学研究科
清水究吾	JR 西日本
平井博之	滝中・高校教諭
藤川こず恵	岩田屋
古野美穂	家事手伝い
山神達也	類設計室
横山ともみ	大学院文学研究科

* 科目等履修生

浅井俊昭	ラ・サール中・高校教諭
------	-------------

* 修士課程

足利亮太郎	文学部科目等履修生
足立 理	日立エスケイソーシャルシステム
有留順子	大学院文学研究科

今里悟之 大学院文学研究科
島崎郁司
山村亜希 大学院文学研究科

* 博士後期課程

亀岡岳志 武蔵中・高校教諭
北内陽子 FASID (嘱託)
米家泰作 文学研究科研修員
水野真彦 大阪府立大学総合科学部助手

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

PD 3. 滝波章弘

○現代南仏丘上集落のルネッサンスー
ーバスプロバンスのセヨンの例——. 史
林 76-5, 751-775 (1993)

○ツーリズム空間の同心円性と関係距
離の抽出——横浜市立小学校家庭の家族
旅行のデータから——. 人文地理 46-2,
121-143 (1994)

○ギド・ブルーにみるパリのツーリズム
空間記述——雰囲気とモニュメントの対
比——. 地理学評論 68-3, 145-167
(1995)

○プレッドの行動行列によるツーリス
ト行動の分析. 地理学評論 69-9, 757-769
(1996)

○作文に表現される子どもの世界——
旅行世界と日常世界の違い——, 人文地

理 48-5, 60-76 (1996)

○ツーリスト経験と対照性の構築——
『旅』の読者旅行文をもとに——, 人文
地理 (印刷中)

PD 1. 米家泰作

○吉野山村における近世前期の耕地経
営——川上郷井戸村を事例として——,
史林 77-1, 116-134 (1994)

○中世山村の境界と山地地形——土佐
国大忍荘槇山の名領域——, 人文地理
48-1, 48-68 (1996)

○『熊谷家伝記』にみる開発定住と空間
占有 ——落人開村伝説の読み解き——.
史林 80-1, 38-74 (1997)

○前近代日本の山村をめぐる三つの視
角とその再検討. 人文地理 49-6, 546-566
(1997)

○近世大和国吉野川上流域における「由
緒」と自立的中世村像の展開. 地理学評
論 71A-7, 481-504 (1998)

特別研修コース. 佐藤廉也

○焼畑農耕システムにおける労働の季
節配分と多様化戦略 ——エチオピア西
南部のマジャンギルを事例として——.
人文地理 47-6, 21-41(1995)

○ "Christianization through
Villagization: Experience of Social
Change among the Majangir", in K.
Fukui, E. Kurimoto and M.
Shigeta(eds), *Ethiopia in Broader*

Perspective, Vol. 2. Kyoto: Shokado Book Sellers, 565-576(1997)

D5. ロサリア・アビラ・タピエス

○ “Nueva perspectiva de las migraciones españolas”, *Anales de Geografía de la Univ. Complutense* (Madrid)13, 111-126 (1993)

○在日外国人と日本人の人口移動パターンの比較研究——大阪市生野区を事例として——, 人文地理 47-2, 62-76 (1995)

○“Migraciones interiores en Japón”, *Estudios Geográficos* (Madrid)57-227, 297-311(1997)

○”La emigración histórica japonesa a Manchuria: estado de la cuestión y documentación” *Estudios Geográficos* (forthcoming)

D3. 李 禧淑

○韓国における氏族マウル住民の移住と適応——ダム建設にともなう移住民・全州柳氏を事例として——. 人文地理 49-3, 1-21 (1997)

D3. 堀 健彦

○八・九世紀伊勢神郡の再編成過程と領域性——その歴史地理学的試論——. 史林 78-1, 97-137 (1995)

○証文類にみる空間表現の基礎的研究——平安・鎌倉期大和国を事例として——

一. 人文地理 49-2, 1-24 (1997)

○平安期平城京域の空間利用とその支配. 史林 (印刷中)

D2. 門井直哉

○長門国府周辺施設の歴史地理学的考察. 史林 79-2, 135-150 (1996)

○評領域の成立基盤と編成過程. 人文地理 50-1, 1-22 (1998)

D2. 祖田亮次

○輪島市海士町の漁民集団——その特質と持続性の背景——. 人文地理 48-2, 62-75 (1996)

D1. 有留順子

○性差からみた大都市圏における通勤パターン ——大阪大都市圏を事例として——. 人文地理 49-1, 47-63 (1997)
[小方 登と共著]

D1. 今里悟之

○村落の宗教景観要素と社会構造——滋賀県朽木村麻生を事例として——. 人文地理 47-5, 42-64 (1995)

D1. 山村亜希

○中世鎌倉の都市空間構造. 史林 80-2, 42-82 (1997)

M2. 中鉢奈津子 (カナダ, クイーンズ大学 M1)

○京都市における高齢者の外出行動. 人文地理 50-2, 68-83 (1998)

M2. 禾 佳典

○東京の世界都市化に伴う性別職種分業の変化. 人文地理 49-5, 63-78(1997)

M1. 泉谷洋平

○棄権率からみた国政選挙と地方選挙の関係 ——コンテクスチュアルな視点からの因果分析——. 人文地理 (印刷中)

M1. 河野良平

○通信販売の流通システムと空間的特性 ——大手業者ニッセンの事例をもとに——. 人文地理 (印刷中)

〈1998 年度講義題目〉

* 講義 *

教授 成田孝三 地理学講義

* 特殊講義 *

教授 成田孝三 空間構造の社会的意義
" 石原 潤 市の比較研究
" 金田章裕 景観史への接近
助教授 石川義孝 人口地理学の諸問題
人環教授 足利健亮 歴史地理学の諸問題

" 金坂清則 地理学における人物研究
総人教授 山田 誠 比較地域形成論
理学研教授 岡田篤正 自然地理学

経研教授 藤田昌久 都市経済学

講師 小林 茂 文化地理学

講師 矢野桂司 地理情報システム論

講師 水野章二 中世の荘園と村落(2)

講師 山本健児 国際人口移動の社会経済地理学的研究

* 演習 I *

教授 成田孝三 地理学研究法 I

" 石原 潤 " II

" 金田章裕 " III

助教授 石川義孝 " IV

* 演習 II *

教授 成田孝三 人文地理学の諸問題

" 石原 潤 "

" 金田章裕 "

助教授 石川義孝 "

* 講読 *

教授 石原 潤 英語地理書講読

" 金田章裕 独語 "

講師 滝波章弘 仏語 "

人文研助手 高嶋 航 中国語講読

* 地理学実習 *

助教授 石川義孝

講師 森 三紀

博物館助手 佐藤廉也

* 大学院演習 *

教授 成田孝三 地域の諸問題

" 石原 潤 "

” 金田章裕 ”
助教授 石川義孝 ”

事務局から

＜地理学談話会 1997 年度会計報告＞

(1997 年 4 月 1 日～1998 年 3 月 31 日)

【資金会計】

〈収入〉

年会費および寄付金 242,980

繰越金 404,752

計 円 647,732

〈支出〉

運営費への振替 297,803

次年度への繰越 349,929

計 円 647,732

【運営費会計】

〈収入〉

資金会計からの振替 297,803

秋期懇親会会費 107,000

春期 ” 128,000

計 円 532,803

〈支出〉

秋期懇親会経費 169,785

論文発表会経費 125,200

会報等印刷費 80,680

通信・文具費等 145,211

弔電 11,927

計 円 532,803

＜受贈＞

○村上次男先生（昭和 11 年卒）より、

教室に下記の古地図類の御寄贈をいただきました。

(1)きょうと誌五十号記念 昭和戊申京都名勝圖繪 池田遥邨筆 きょうと発行所

(2)地理學 第四卷第一號 古今書院 1936 年（附録 地球輿地全図）

(3)大日本行程大繪圖

(4)大日本道中細見繪圖

(5)五海道中細見記

(6)内外地圖集覧（日本之部） 松島剛著 春陽堂 明治廿七年

(7)内外地圖集覧（外国之部） 松島剛著 春陽堂 明治廿七年

(8)標準外國地圖 東京開成館編輯所編 東京開成館 昭和十年（修正十一版）

(9)タッセン式 日本精圖 守屋荒美雄著 帝國書院 昭和四年（訂正発行）

(10)國郡全圖 上・下巻

○由比浜省吾先生（昭和 27 年卒）より、下記の地図類を御寄贈頂きました。

(1)英国土地利用図(Land Utilization Survey of Britain)

① Norwich & Great Yarmouth (1931- 2 年測図)

②The Isle of Thanet (1958 年測図)

(2)明治 18 年発行京都府地券（5 枚）

○河野通博先生（昭和 16 年卒）より、平成 10 年 2～4 月に、中国関係の文献を御寄贈頂きました。以下にその一部を

掲載させていただきます。

《書籍》

- (1)河山集 1-5 集 史念海著
 - (2)論地理科学 錢学森等著 1994 年
 - (3)中国歴史地理 張歩夫著 1987/88 年
 - (4)中国方志考 張國淦著 1962 年
 - (5)中国歴史文化名城詞典 中国歴史文化名城詞典編委会 1985 年
 - (6)洞庭歴史地理 張歩夫著 1993 年
- 他 23 冊

《雑誌》

中国歴史地理論叢
歴史地理研究
地理研究
地理科学 等

地図類は地理学教室所蔵の古地図コレクションと共に、新設の京都大学総合博物館に保管し、書籍は文学研究科蔵書として今後の研究・教育に供したいと存じます。

＜寄付＞

以下の方々に御寄付いただきました。

(括弧内の数字は卒業年、敬称略)

米倉二郎(S6), 渡辺茂蔵(S7), 山口平四郎(S9), 村上次男(S11), 河野通博(S16), 高村正雄(S22), 高橋 正(S31), 酒井敏明(S35), 能勢正寛(S37), 松田常志(S38), 山田 誠(S43), 伊東 理(S49), 藤井 正(S54), 小方 登(S55), 市川丈(H3), 安福伸光(H9)

＜訃報＞

前回の会報発行以降、次の方々が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(確認分、括弧内の数字は卒業年、敬称略)

武 政治 (S7)
今村 新太郎 (S9)
木村 憲治 (S11)
石川 憲明 (S22)
島田 正彦 (S29)
小林 健太郎 (S36)

＜お知らせ＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局までご一報下さい。

(数字は卒業年、敬称略)

都子 亓 (S15)
今井 平八 (S19)
田島 渡 (S23)
川副 昭人 (S29)
野田 茂生 (S36)
林 洋子 (S40)
岡本 靖一 (S42)
石角 剛 (S45)
山田 憲子 (S45)
福田 新一 (S46)
池内麟太郎 (S48)
西沢 仁晴 (S49)
生田 博文 (S51)
長谷川正雄 (S52)
遠藤 正雄 (S53)

山口 一郎 (S55)
山下 和久 (S57)
松本 弘史 (S58)
加藤 典嗣 (S63)
那須 久代 (S63)
新谷 泰久 (H2)
岩部 敏夫 (H3)
小口 稔 (H3)
石村 裕輔 (H4)
渋谷 良治 (H4)
糸原 健 (H5)
御手洗央治 (H5)
川添 利明 (H7)

【編集後記】

談話会報の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。御寄稿，御講演いただきました先生方，ありがとうございました。

編集 有留順子
今里悟之
山村亜希
真木智子

＜1998 年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞

本年は下記のように実施する予定ですので，あらかじめご予定下さるようお願いいたします。

記

日時： 10 月 31 日 (土)

場所： 京都大学文学部

講演予定者：

井関弘太郎 (名古屋大学名誉教授)

久武哲也 (甲南大学教授)

藤田裕嗣 (神戸大学助教授)

☆本年度の談話会費 (1000 円) を，未納の方は，同封の振込用紙にてお払い下さいますよう，よろしくお願いいたします。